

札幌徳洲会病院 整形外科外傷センター

倉田 佳明

札幌徳洲会病院は、約200万人の人口を抱える札幌市に1983年に設立され、以来、当地域の地域医療・救急医療の中心的役割を担ってきました。2007年には一般整形外科に加え、四肢外傷治療に特化した整形外科外傷センター(以下、外傷センター)が開設されました。外傷センターでは、一般的な骨折の治療はもちろん、他施設では治療の難しい重度四肢外傷(重度開放骨折)、関節内骨折、切断指(肢)などの治療を行っています。

現在、外傷センターには手外科専門医が3名います。一般整形外科には手外科医が在籍していないため、手の変性疾患等も外傷センターに依頼され診療していますが、当院の手外科領域の症例は、その多くが外傷症例です。骨折、腱損傷、神経・血管損傷だけでなく、切断指、mangled hand、各種皮弁といった手術等も積極的に行っています。多くの施設では、重度開放骨折に対し、骨折は整形外科医、軟部組織再建は形成外科医が分担して治療にあたることが多いと思います。しかし当センターではorthoplastic surgeonとして、骨折も軟部組織再建も、一貫して当センターの医師が治療を担当するのが特徴です。一例として、前腕のGustilo 3Bの開放骨折に対して遊離皮弁術を施行した症例を提示します。

外傷を中心に手外科研修を考えている方、マイクロサージャリーに興味がある方、経験を積んでステップアップを考えている方、見学等も大歓迎ですので、お気軽にお問い合わせ下さい。

症例の紹介

A



40代女性、攪拌機に前腕を巻き込まれて受傷した。屈筋群、伸筋群の損傷を伴う前腕両骨のGustilo 3Bの開放骨折であった。

B



デブリドマンと骨の仮固定を行った後、受傷後3日目にプレートによる確定的内固定、筋・腱修復、皮膚欠損に対する遊離前外側大腿皮弁を施行した。

C



最終診察時、指の拘縮はやや残っているものの、概ね良好な機能回復を得られている。